

手水鉢について（その2）

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. 手水鉢の種類

手水鉢は大きく3つに分類される。

① 蹲踞（つくばい）

手水以外の石と組み合わせ、つくばって（しゃがんで）使う

② 立手水（たてちょうず・たちちょうず）

立ったままの状態を使う

③ 縁先手水（えんさきちょうず）」

縁側から使う（鉢前“はちまえ”とも呼ばれる）

日本庭園に置かれている手水鉢は、茶室手前に設ける蹲踞のように本来の機能を有したもののもあるが、現在、大多数は庭の添景物として置かれる。

石に着目して分類することもある。

① 自然石手水鉢

A. 自然石をそのまま用いたもの（石のくぼみが水穴となる）

B. 自然石の頂部に水穴を掘ったもの

C. 頂部を水平にカットして水穴を掘ったもの

② 加工石（創作形）手水鉢

舟型や一文字型が代表的だが、扇子型や鉢型などデザインはさまざま

③ 見立物手水鉢

灯籠や多層塔の一部などの石造品を手水鉢に転用したもの

さらに形状やデザインによる名称也多岐にわたる。代表的なものを以下に示す。

形の類似性による命名

富士型、舟型、一文字型、棗型、菊型、柵型など

寺名（オリジナルの写しが一般に拡がる）

竜安寺型、銀閣寺型など

デザインそのものによる命名

袈裟型、四方仏型、吾唯足知型、布泉型など

故事に由来

司馬温公型、露結型など

見立物の場合は、元の石造品名で呼ばれることもある

宝篋印塔型、橋杭型、笠型（石灯籠）など

① 蹲踞

① 自然石



手銭邸・大社

② 加工石



明々庵・松江

③ 見立物



高見邸・斐川

② 立手水

① 自然石



出雲文化伝承館・出雲

② 加工石



石橋邸・平田

③ 見立物



菅田庵・松江

③ 縁先手水

① 自然石



菅田庵・松江

② 加工石



原鹿豪農屋敷・斐川

③ 見立物



一畑薬師書院庭園・平田

形状・デザインによる分類名

一文字型



勝部邸・平田

棗型



康国寺・平田

宝篋印塔型



八雲本陣・松江

ちなみに寺社に参拝する前に手や口を清める場所は手水舎（てみずしゃ、ちょうずやなど呼び方はさまざま）で、そこに置かれるものは水盤と呼ばれる。

2. 県東部の手水鉢

これまで撮りためた写真データを利用して、昨年は島根県内の庭に置かれている手水鉢の傾向を概観した。今年度は対象エリアを県東部に限定したうえで、新たに訪れた庭のデータを加え、より詳細に調べてみた。調査エリアが縮小しても手水鉢の数が増えているのはそのためである。今回の調査範囲では金属製や陶器製の手水鉢は一畑薬師書院庭園、櫻井家庭園など全部で3基しかなかった。以下に示すのは石製の手水鉢についてである。

種類別にみると、①蹲踞手水鉢 33 基、②立手水鉢 24 基、③縁先手水鉢 28 基となっている。蹲踞 33 基のうち茶室用が 13 基、庭の添景物として置かれたものが 20 基である。

表 1 県東部の庭園に置かれている手水鉢

種類		加工による分類			計
		①自然石	②加工石	③見立物	
① 蹲踞手水鉢	茶室	8	3	2	13
	添景	9	9	2	20
	小計	17	12	4	33
② 立手水鉢		22	1	1	24
③ 軒先手水鉢		17	10	1	28
合計		56	23	6	85

3. 蹲踞手水鉢

茶室用 13 基の内訳は①自然石 8 基、②加工石 3 基、③見立物 2 基となっている。

①は丸みを帯びた石の頂部に円形の水穴を設けたものが多く、②は菅田庵、観月庵（普門院）、東陽坊（一畑薬師本坊書院）に置かれている。

③は石塔の 1 部を転用したもので、茶室楽々（本高見家）と為楽庵（絲原家）に置かれていた。

添景物としての蹲踞 20 基の内訳は、**①**自然石 9 基、**②**加工石 9 基、**③**見立物 2 基である。

①、**②**とも茶室用と類似したデザインが多いが、八雲本陣と手銭邸には長方形タイプも置かれていた。**③**は石塔や宝篋印塔を転用したものである。

県東部の庭に置かれている蹲踞手水鉢は総じて丸みを帯びたデザインのものが多く、菅田庵の蹲踞に似たイメージを受ける。柵型や銭型の手水鉢は発見できていない。

4. 立手水鉢

立手水鉢 24 基のうち**①**自然石タイプが 22 基、うち 18 基は出雲地方で「テンスイ」と呼ばれるものである。庭に「テンスイ」を置くのは平田・斐川・出雲・雲南・奥出雲エリアで、今回の調査対象に限られた話ではあるが安来・松江エリアの庭には置かれていなかった。「テンスイ」は玄関に向かうアプローチから庭に足を踏み入れてすぐの左手に置かれることが多い。座敷からみると庭の左手前あたりにあって、その奥に春日型灯籠というのが出雲流の定石でもある。

自然の窪みを水穴として利用した手水鉢は貴重な存在だが、写真を見返してみると 3 基発見できた。それ以外は円形の水穴を設けたものが多いが、石の頂部を平坦にカットして出来た断面に沿って水穴をあけたタイプもいくつか見られた。

②加工石タイプは勝部邸の一文字型、**③**見立物は菅田庵の橋杭型である。

5. 縁先手水鉢

縁先手水鉢は 28 点確認できた。**①**自然石 17 基、**②**加工石 10 基、**③**見立物 1 基である。**①**のうち鉢前石（水穴が無くて上に別の手水鉢を置くタイプ）が 7 基、水穴が掘られたものが 10 基である。石の頂部を水平にカットしてから水穴を掘ったものと自然石の形状を残したまま水穴だけを掘ったものの割合はおおむね半々である。

水平カット部分に水穴を掘るタイプにも細かな差異があり、木幡山荘のものは自然な趣きを残して水穴は不整形だが、絲原邸では周囲を等寸法（2～2.5 寸）に残したデザインとなっている。

②は棗型、円柱、四角、八角などさまざまなデザインがあるが、絶対数が多くないので分布傾向は不詳である。**③**は一畑薬師書院庭園に置かれている橋杭型である。

調査データと呼べるほどの精度をもったものではないが、分類して数を数え上げることで多少はデザインの傾向が見えてくるように思える。

石灯籠や樹種など同様の切り口で調べてみるのも面白いと思うが、そのような観点で調査し撮影を行ってきたわけでもなく、すでに庭じまいして再訪がかなわない庭も増えてきていることが残念である。